

東洋大学板倉キャンパスにおける留学生支援(受入れ体制)への取り組み

東洋大学
板倉事務部
教学課

太田 浩

一九九七年四月に東洋大学第四番目のキャンパスとして「板倉キャンパス」が、群馬県邑楽郡板倉町(都心から約七〇キロ)の板倉ニュータウンの一角に開学した。板倉キャンパスには、国際地域学部と生命科学部の二学部が新設され、そのうち国際地域学部では、設置にあたって文部省からの指導もあり、定員一五〇名の三〇%にあたる四五名の留学生を毎年受け入れることとなった。毎年定員の三〇%、四五名もの学位取得希望留学生を一学部で受け入れるということは、本学既存学部のこれまでの留学生受入れ実績から見ても、また他大学の実績から見ても、極めて異例のことである。しかも、バブルの終焉、その後の長い不景気という日本経済の動向にあわせるかのごとく、日本留学人数の伸びも鈍化から、ついに減少へ転じた時である。さらにキャンパスの立地条件も留学生募集には、決して有利とはいえない。新キャンパスの開学にあわせて、「板倉東洋大前駅」(東武日光線)が開業したとはいえ、日本語学校が

集中している新宿、高田馬場周辺からは電車を乗り継いで一時間二〇分程度要するからである。

こういう逆風の状況下であっても、開発途上国の地域開発に貢献することを主要な目標として設立された国際地域学部にとって、多くの留学生を受け入れることは、教育・研究の面で追い風であることに疑う余地はなく、よって以下に述べるような様々な留学生支援(受入れ体制)への取り組みを実施してきているのである。

セメスター制の導入

板倉キャンパスでは、本学工学部(川越キャンパス)において既に実施済みであるセメスター制を導入し、四月および一〇月での入学(三月および九月での卒業)を可能とした。これは、海外の学年暦に対応することにより、国内の日本語学校だけでなく、海外でも留学生を募集し、志願者が母国での学校卒業後、すぐに国際地域学部へ入学できるように

するためである。後述の「日本語集中コース」とあわせると日本留学に伴う時間的なロスをも最小限に押さえることができる。

日本語集中コースの設置

非漢字圏を含めできるだけ数多くの国から留学生を受け入れるため、国際地域学部では、日本語能力に関する受験資格を本学既存学部や他大学で標準的な基準としている日本語能力試験一級レベルではなく、「日本語能力試験二級程度以上」としたことで、授業に堪えるだけの日本語能力を持たない留学生の入学を想定した。そこで、入学直後に本学部独自の「日本語能力判定試験」(ブレイスメント・テスト)を実施し、日本語能力が「日本語能力試験一級レベル」に達していないとみなされる留学生を対象に、入学後最初のセメスターで「日本語集中コース」を正規課程と並行して受講してもらうこととした。この集中コースは、従来の日本語別科を組織的にも機能的にも四年間の学部教育の中に組み込んだといえる。留学生個々人の日本語能力にあわせて集中コースを週に四コマ(六時間)または九コマ(二三・五時間)受講してもらうことは、物理的にも教育的効果からいっても正規課程での履修科目および時間数を制限せざるを得ない。正規課程におけるどの科目を履修させるかは、本人の希望も考慮しながら

め、(財)内外学生センターの指定宿舍事業による補助を受け、民間宿舍の一括借り上げ方式を取ることにした。

カリキュラム担当教職員と留学生担当の教職員が共同で一人一人指導する。また、集中コースは、早期に日本語能力を「日本語能力試験一級レベル」(正規課程の授業についていけるようにする)まで引き上げることを主たる目的としながらも、日本語担当教員だけでなく、専門教育担当の教員も携わることであり、国際地域学への関心を深めたり、大学での学習方法も身に付けられるようになっていく。

先述のセメスター制と併用すると、海外の日本留学希望者(日本語学習者)が日本語能力試験二級程度の日本語能力で、本学国際地域学部で直接入学し、「日本語集中コース」を経て四年間で卒業、学士取得が可能となるわけで、従来の日本語学校を経由した場合と比較すると一二年間の留学期間の短縮となる。

3 留学生宿舍の設置

留学生を海外から直接受け入れること、また板倉キャンパスの地理的な状況からみても廉価な宿舍を留学生に提供することは必要不可欠であるが、新たに宿舍を建設するには建設費のみならず運営・維持費も相当かかるた

昨年の開学にあわせて、かつて電気メーカーの社員寮として使用されていたアパート一棟(一八室)を留学生専用宿舍として、今年以前コンピュータ・メーカーの社員寮だった物件(二〇室)を日本人・留学生混住型の宿舍(ただし、借り上げ部分は留学生用の二〇室のみ)として、本学が一括して借り上げ、留学生に一室月額三万円、敷金(保証金)、礼金(入寮金)等なしで提供している。

4 奨学金制度

国際地域学部で学ぶ留学生対象に月額五万円(年額六〇万円)の奨学金を新たに設け、学習奨励費、(財)群馬県国際交流協会、ロータリー米山記念奨学会等学外からの奨学金とあわせて当該年度に入学した留学生の少なくとも半分が奨学金を受給できることを目標としている。今年度は、通貨・金融危機にあるアジア諸国から私費留学生に対する学習奨励費の追加支給もあり、留学生全体の八〇%弱が奨学金を受給している。最近、地元自治体から留学生対象奨学金への財政的援助の申し出もあり、大学として今後さらなる奨学金制度の充実を図りたいと考えている。

5 留学生特別保険

板倉キャンパスでは、開学後早々に「板倉キャンパス外国人留学生特別保険」と称して、都内の保険会社二社の協力の下、留学生に関わる「死亡」、「後遺傷害」ならびに「救済者費用」を補償し、かつ事故処理、遺体処理等について専門的かつ高度な技術・法律上の知識や経験が要求される場面でのサポートを含めた保険制度を設けた。この保険は、本学を「契約者」、被保険者を「板倉キャンパスの留学生」と定めた一年間補償型の掛捨て保険で、毎年留学生数が確定する五月末に本学が保険料(三〇〇〇円/人)を全額負担して契約する。この保険は、本学で過去におきた不幸な留学生の死亡事故、病気等の実例に鑑み、特に留学生の親族等の来日、滞在に伴う費用(救済者費用)、事故に巻き込まれた際の捜索・救助費用、死亡時の遺体移送または処理に伴う費用ならびにテクニカルなサポートの必要性から生まれた。実際、この五月にタイ人留学生が下校中にバイクで自損事故を起こし、脳挫傷の治療で入院した際に、学生教育研究災害傷害保険(財)内外学生センター所管)、国民健康保険などとともに有効に活用され経済的な負担は最小限にとどめられた。事故そのものは、不幸なことではあったが、来日された家族からは本学と保険会社の対応

に感謝された。

6 地域からの支援

板倉キャンパス開学以来、地元自治体からは留学生に対して様々な支援を受けてきている。(財)群馬県国際交流協会からは、毎年四月に新入留学生を対象にリサイクル自転車を支給されている。リサイクルといっても群馬県自転車軽自動車商協同組合によって、不良な箇所はすべて手直しされているので、新品同様の状態で支給される。リサイクル自転車は、現在の留学生宿舍が大学に隣接していないこと、地元在住者ということを考慮して、宿舎から通学する留学生に対して優先的に支給されており、好評を得ている。また、板倉町からは昨年五月に留学生歓迎パーティを開催してくれたのを皮切りに、教育委員会を通じて、町の広報誌上で毎月地元在住の留学生の紹介記事を掲載してもらったり、小・中学校、高校との交流プログラムの実施、町の祭り、行事等への留学生の招待、留学生による語学講座の実施、留学生主催の交流プログラムへの後援等、留学生が地域住民と交流できる機会をできるだけ多く設けるために、多大なる支援と協力を得ている。特に、学校との交流は留学生、地域住民ともに好評で、地元新聞にも幾度となく掲載された。たとえば、小学校で児童とともに田植えを行い、収穫後児童が

その米でカレーライスをつくり、留学生を招いたり、高校の調理実習の授業で留学生が先生、生徒に母国の料理の手ほどきをしたりと双方方向の交流が図られている。この種の行事では留学生も援助を受けるだけでなく、自分たちが地元へ貢献している実感が得られるため満足度も高い。最近では、県境を越えて、埼玉県、栃木県の学校からも交流の申し出があり、逐次実施している。

留学生対象授業の一つである「日本事情」の場でも地元の協力を得ている。館林警察署による留学生のための交通安全講習では、海外と比べた場合の日本の交通法規の特徴、海外の免許証から日本の免許証への切り替え方、交通違反をした場合の処分などを詳しく解説してもらった。また、国際ソロプチミスト館林の方々による日本文化紹介・実演の授業も今年から実施されている。第一回の野点(茶道教室)はキャンパスの中庭で行われ、日本人学生も多く参加した。講師を務められた会員の方々は、留学生の真剣な受講態度とユニークな質問に感心され、継続して実施していくことの意義の大きさを確信されたようである。

7 今後の課題

留学生をさらに地元に着着させるためには、宿舎とならんでアルバイト先の確保が重

要である。この点では昨今の不況の影響もあり充分とはいえないため、今後も地元自治体、商工会議所等の支援を受けながら積極的に開拓していく必要がある。また、民間宿舎への入居を希望する留学生が契約時に求められる保証人を大学が引き受ける制度も未だ実施に至っていないが、家賃一か月相当分の保証金を留学生に預託してもらい、各教員(留学生担当者会)が請け負う方向で固まってきた。日本語能力が不足している留学生に対するチューター制度も早期に実施が望まれるものの一つであるが、一、二年生のためのキャンパスではチューターの人材確保が難しいのが現状である。本年は日本語教員の指導の下、試験的に留学生交流サークルの学生がチューターの役を担っている。地域との交流促進という観点からは、短期のホームステイまたはホームビジットの実施についても検討しているところである。

東洋大学板倉キャンパスは地域密着型の大学として、また板倉町は大学、ニュータウンを核に地域開発のモデルとして、共に今後の大いなる発展が期待されている。両者の発展を結ぶものの一つとして、多くの留学生の存在がキャンパスと地域の国際化に貢献することを願って止まない。